

## 顕浄土真実教文類一(三)

高田短期大学学長 栗原 廣海

## 一、出世本懐の経

前回考察した「教文類」の冒頭で、親鸞聖人は、  
 积尊があらゆる人々を救わんとして、特に愚かな  
 凡夫のために真実の利益である弥陀の本願の名号  
 を説かれた『無量寿経』こそが真実の「教」であ  
 るとされ、その本願のはたらきは、往相・還相の  
 二種の回向であらわされること、そして往相の回  
 向に真実の「教」「行」「信」「証」の四法がある  
 ことを明らかにされました。

それに続いて、

何をもちか 出世の大事なりと知ることを  
 得るとならば

別することで、中国や日本の各宗の祖師たちは、  
 皆この教相判釈を行い、それを宗義の基礎としま  
 した。聖人が学ばれた天台宗には「五時八教」と  
 いう教相判釈があり、『法華経』を出世本懐の経  
 としています。それは『法華経』の「方便品」に  
 「一大事因縁をもつて世に出現する」という一節  
 があることを一つの根拠にしているのですが、こ  
 の事実を鑑みるとき、聖人のおっしゃる「何をもち  
 つか出世の大事なりと知ることを得るとなら  
 ば」は、まさにこの一節を強く意識されものと言  
 うことができるでしょう。

## 二、なぜ『無量寿経』以外の経典も引用されるのか

『無量寿経』が真実の教であることを証明する  
 のに、なぜ他の経が引用されているのでしょうか。  
 それは、『無量寿経』には異訳が存在するからで

と述べられ、続いて『無量寿経』『無量寿如来会』  
 『平等覚経』と、憬興の『無量寿経連義  
 述文賛』が引用されています。「出世の大事」  
 とは、积尊がこの世にお出ましになられた真意・  
 目的のことです。『無量寿経』こそが真実の「教」  
 であると断定されたということは、积尊がこの世  
 にお出ましになられた真意・目的は、『無量寿経』  
 を説くことにこそあった、つまり『無量寿経』こ  
 そが积尊の出世本懐の経であることを聖人は宣  
 言されたということですが、八万四千とも言われ  
 る积尊の一代の説法の中で、何を根拠にそのよう  
 に言うことができるのか、その宣言の正しさを、  
 その後の引文をとおして明らかにしようとしてお  
 られるわけです。このことは、親鸞聖人が比叡山  
 で二十年間勉強された天台宗の「教相判釈」が  
 意識されていることは疑問の余地がありません。  
 教相判釈とは、弥陀の生涯の教えを、分類・判

す。古来、「五存七欠十二訳」と言われ、五種類  
 の漢訳は現存していますが、七種類の漢訳は散逸  
 して現存しません。散逸した七種類全部が存在し  
 たかどうか、疑わしいという説もあります。

現存する五種類は次のとおりです。

- ① 『仏説無量清浄平等覚経』四卷
- ② 『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』  
 (別名『大阿弥陀経』)二卷
- ③ 『仏説無量寿経』二卷
- ④ 『無量寿如来会』二卷
- ⑤ 『仏説大乘無量寿莊嚴経』三卷

これらは成立年代に差があり、大まかな言い方  
 ですが、①と②は相当古い時代にインドで成立し  
 た経典の翻訳であり、③④⑤は、①や②がもとに  
 なって、後に成立した経典の翻訳です。ですから  
 説かれている内容も微妙に異なるところがありま  
 す。聖人は③の『無量寿経』を正依としながら

も、異訳にも目を通され、『無量寿経』からの引用だけでは十分に真実が伝わりづらいとお考えになったところは、異訳にたずねられ、異訳からの引用でもって補っておられるのです。

「教文類」においては、『無量寿経』こそが釈尊の出世本懐の経であることを証明するために、『無量寿如来会』と『平等覚経』の文にもたずねておられるわけです。ちなみに、他の箇所では②も引用なさっていますが、⑤を引用なさることはありません。

### 三、出世の大事

では、釈尊がこの世にお出ましになられた真意・目的が『無量寿経』を説くことにこそあったことを、何によって知りうるのでしょうか。それは、これから愚かな凡夫のために真実の利益である弥陀の本願の名号を説こうとされる釈尊のお姿

が、弟子の阿難が今までに拝見したことがないほどに神々しく気高く、驚嘆せざるを得ないほどであったことよって知ることができると言うのです。

『無量寿経』では、阿難が拝見した、お姿の尊さに現れている五つの徳を釈尊に申し上げています。第一に「今日世尊、奇特の法に住したまえり」と言われます。説法をする前には、釈尊は「定」に入られるのが常であるが、今日はいつもと違ふ特別の「定」に入っておられるように拝察されると申し上げているのです。

第二に、「今日世雄、仏の所住に住したまえり」と言われます。煩惱の悪魔を対治する世の雄者として、仏のさどりの世界に入っておいになるように拝せられると言うことです。

第三に「今日世眼、導師の行に住したまえり」と言われます。すぐれた智慧で世を導く眼として、

導師の行におつきになつていようように拝せられると言うことです。

第四に、「今日世英、最勝の道に住したまえり」と言われます。世の中で最もすぐれた智慧ある者として、この上ないさどりの道にお入りになつていようように拝せられるということですよ。

第五に、「今日天尊、如来の徳を行じたまえり」と言われます。天の中で最も尊い者として、如来の徳を行じておいでになるように拝せられるということですよ。以上、釈尊が五つの瑞相をあらわしておられるということよ、これらは「五徳瑞現」と言われています。

阿難は続けます。

「去・来・現の仏、仏と仏とあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうことなきことを得んや。何がゆえぞ威神の光、光いまししかる」と。

「過去・現在・未来の三世の諸仏は、お互いに念じあわれるということですよ、今日の世尊もまた、諸仏を念じておられるに相違ありません。そうでなければ、どうして世尊のお姿がこのように神々しく光り輝いておられるということがありましようか」

これは、今から素晴らしい説法をなさる準備に相違ございませんと、阿難の確信が語られたことばだと言えらるでしょう。

釈尊は阿難に、「諸天の、汝を教えて、来して仏に問わしむるや、自ら慧見をもつて、威顔を問えるや」、つまり、「梵天や帝釈天等の諸天があなたに教えて、私の所へ来させて、そのような質問をさせたのか、それとも、自らの智慧で私の威顔を見て、これから私が素晴らしい説法をすることを察して問うたのか」と問われます。

以下は次回を期したいと思ひます。